

日本人最初のイエメン入国者

アラビア半島の突端に位置し、紅海の入口にあってスエズ運河へ通じるアデンは、古くから天然の良港として栄えた。この地を橋頭堡として莫大な利権を得た大英帝国は、多年に亘りアデンとその周辺首長国を植民地化して統治してきた。アデンは多大な犠牲を払った自国人同志の激しい内戦の末、1967年11月30日漸くイギリスから独立を勝ち取り、南イエメン人民共和国となった。その後イエメン人民共和国と国名を改め、北隣の北イエメンと統合して「イエメン共和国」となって今日に至っている。

その内戦中に2つの解放戦線が相争った複雑な独立闘争に関心を抱いた、ひとりの日本人男性がいた。当初のアデン独立予定日、68年1月11日にアフリカのジブチからやって来たその男は、有刺鉄線に囲まれた仮入国審査室で在日英国大使館が発給したアデンの入国ビザを提示して、入国手続きを行った。しかし、入国係官から植民地時代にその統治者によって発給された、そのビザは認められないと無慈悲にも入国を拒絶された。アデンの電撃的な独立の前倒しによって、男が所有するビザが無効とされてしまったのである。迂闊にも不意を突くような独立日時の繰り上げを知らなかった男は、独立祝典行事で解放戦線兵士や住民らと祝杯を挙げるつもりだったが、その目算も狂ってしまった。

アデン空港で入国出来ず男が途方に暮れていた時、偶々同情した係官が植民地時代のビザは無効だが、新「平和」国家が新しいビザを発給することは出来るとそっと囁いてくれた。ワラをもつかむ思いで急遽ビザを申請すると、暫くして新国家のビザを発給してくれ、「お前が最初の日本人だ。心より歓迎する」と祝福された。男はそのビザを手に独立後最初の日本人として勇躍入国し、早速灼熱地獄の中を市街へ向かった。内戦が終わり弾痕も生々しい石造りの家々、ヘジャブで顔を覆う女たち、ラクダや羊の群れ、等々が混然とする中で、男はアデンでアラブの風を全身に受け止めた。

男はその前年戦火のベトナムで危機に瀕し、アデン入国前にはスエズ運河で警察に、戒厳令下のアンマンではヨルダン軍に身柄を拘束された。

風聞によれば、破天荒な体験を重ねて男は今、次は来る独立50周年記念式典に立ち会い、半世紀間のタイム・ラグを実感しようと計画しているらしい。